

ご挨拶

石田典子¹⁾

Look back over my Limnology

Noriko ISHIDA¹⁾

2016年3月末を持って名古屋女子大学を定年退職いたしました。幸いなことに大きな怪我や病気もなく、ほぼ40年の研究者・教員生活を一つの機関で過ごしたことになります。この間多くの方々に知り合い、ご教示いただきました。すでに故人となられた方も多く、お一人お一人にお礼を申し上げることがなかなかできませんので、ひとまずはこの場をお借りして、これまでの皆様のご厚情にこころより感謝いたします。日本陸水学会東海支部会へは1998年の発足時より参加させていただき、18年過ぎたことになります。この間2012年、13年には会長を務めさせていただきました。2012年は名古屋で日本陸水学会の大会があり、エクスカーショ、ポスターセッション会場づくりなど多くの企画を支部会の皆様に発案、ご協力いただき、地域の特性を生かした大会となったことが思い起されます。今回は退職を機に、これまでを振り返ってエッセイをというお話があり、稀有な機会をいただいたことに感謝いたします。

就職した1976年頃、名古屋女子大学ではいくつかの公的機関などから委託研究を引き受けていた関係で、矢作川、豊川などの多くの河川調査に参加することになりました。初めて名古屋に住むことになって地理的に右も左もわからない状態でしたが、東海地方は都市部から一步でると水量の豊かな大きな河川、深い山が間近にあるという水と緑の豊かな土地だなあと感じたことを覚えています。大阪教育大学の3回生のときに生態学研究室に入り、卒業研究を三田村緒佐氏に師事したことから、学生時代は化学的アプローチにより、ため池の窒素代謝と基礎生産の研究をスタートしました。就職後に河川の付着藻類を検鏡せよということで、戸惑いましたが、当時名古屋女子大学にいらした巖靖子氏に教わりながら進めました。大阪教育大学生態学研究室のボス水野壽彦氏には、学生時代には授業でも研究室でも直接教えていただいた記憶はないのですが、必要に迫られては動物プランクトンについて

教示いただきました。また、珪藻の同定のために元東京学芸大学の小林弘氏のところに伺ったことをはじめ、いろいろと手を尽くしながら、その後も河川の付着藻類の種類や動態に関する研究を進め、顕微鏡を相手に長い時間を過ごしました。特に滋賀県と三重県の県境を分水嶺とする河川上流域の付着藻類相を地質特性との関係で調べた研究では、サンプル数の多さに辟易としながらも、四季折々に素晴らしい景観に癒される中での調査は毎回楽しみでした。

1990年代の半ばごろから、琵琶湖沿岸域において付着藻類群集の基礎生産を中心に研究を進めました。この時期、北湖では和名アオミドロである *Spirogyra* の大増殖が特に初夏をピークとしてみられ、付着藻類の群集構造の季節的な変化に伴い沿岸域の基礎生産や物質代謝に及ぼす影響が変化することが確認できました。これらの研究成果から結果として学位を取得することができ、さらに2011年度から3年間琵琶湖沿岸域の湖岸底質と付着藻類群集との関係に関する研究で科研費を得ることができました。継続することでご褒美をいただいたと実感しています。長い年月に渡って多くの方々にご指導や励まし、支えをいただいたことが、継続できた原動力と感謝しています。とりわけ学生時代から一貫して我慢強く叱咤激励してくださり、また琵琶湖での調査研究に限りなく便宜を図って後押ししてくださった元滋賀県立大学湖沼環境実験施設の三田村緒佐氏にはただただ感謝の気持ちでいっぱいです。残念ながら、その科研費による研究の解析がまだ論文として仕上がっていないことが、今も未提出の宿題となっています。付着藻類の研究は研究例が少なく、また礫、砂、泥、水草などに付着して多様なハビタートを持つ藻類群集の関わる現象が個々の水域での現象と限定されやすいということがあります。無機物やデトリタスを含み渾然一体となった群集については実験方法の困難さがつきまとい、実験系での解析と野外における動態との関係が問題にされます。多様な

¹⁾ 元日本陸水学会東海支部会長 (2012年度), The former chair of The Tokai Branch of The Japanese Society of Limnology

生活空間に応じて種類構成が異なり様々な動態を示す付着藻類は、河川や湖沼沿岸域などの水域の総合的な環境を指標するものです。系の基幹であり多くの役割を持つものとして、今後多くの課題の研究が進むことを期待しています。陸水学の調査研究では、いろいろな水域の初めての場所に行くことができ、野外で多くの時間を過ごすという特別な楽しみがありました。私は水のある風景はどれも好きですが、とりわけ奥琵琶湖の浜の湖面が光る様子、山地の河川水がこぼれるように流れ下る様子は繰り返し訪れても見飽きません。実際に野外に出て、清冽な水と周辺の景観が一体となる風景の爽快感を感じる一方で、ゴミや汚れを残念に思う気持ちを共有することが、水環境の保全につながるのだと思います。

また、理科支援員配置事業特別講師として愛知県の小学校に出前授業に行く機会が何度かありました。小学校側と相談して、簡単な水質検査をすること、顕微鏡持参で訪れてプランクトンの観察を指導することなどを行いました。ゼミナール学生にも手伝ってもらい、学生にとっては小学校での実習という役得があり、子どもたちに対しては通学路にある都市河川の水、ため池や海の生き物を学校で調べるという身近な自然体験を提供できたとして、有意義なことだったと考えています。私にとっても、子どもたちにわかる言葉でかつ正確さを曲げないで無駄を省いて説明するためにはと、いろいろと考えることのあった企画でした。子どもたちの感想文には、(拡大されて) 見ることで面白くという素朴な感想から、驚くほど正しく理解してくれていた、鋭い質問だったり、科学者になりたいという宣言があったりなどしっかりとした手ごたえが感じられるものが多くありました。まさに実践的な理科の教育に関わった得難い経験であったと思います。残念ながら、現場の状況もあり、また自分自身も忙しく、こういう機会はなかなか得られないのですが、専門用語を含めて普段使っている言葉を見直し、考えを整理するための一つの機会になったと思います。

昨今大学では教育面での働きが大きく求められています。小学校・幼稚園など初等教育の教員を養成する学科に長年所属していて、年とともに学生指導や授業に関して責任を感じることが大きくなりました。それは、自分の子供を安心して託すことができる先生にはどのような人物が望ましいのか、そのような人物を育てるにはどのように指導すればよいのかということを意識するようになったためです。学生との関係はなかなか難しい場合がありますが、年を重ねると鷹揚にかつ長い脈絡で考え、対応することができてきて、達成感や喜びも共有できるようになってきました。学生に陸水学を直接教えることはなくても、卒業研究や授業などのさまざまな機会を通して、いくらかでも水に関わることを伝えたことが、個々の人にとって何かの折に思いを寄せるエピソードになり、ほんの少しでも底辺の拡大につながるのではと期待しています。

大学教員の余禄として、専門分野の異なる同僚の話を聞くことは効率よく学べるチャンスであり、それを得られる環境であったことは大きな収穫だったと思います。年齢の異なる人々と交流することによって、知らないことに気付くことも多々あり、雑談の中からも多くのことを学ぶことができました。年齢や専門分野の違いに関係して、新鮮なものの見方に気付くこともありました。授業や会議やその他もろもろのことに追われて人と話をするのがついつい少なくなりがちであることは、どのような職場においても同様で、人間関係が希薄となる傾向があると聞きます。しかし、人とのコミュニケーションは確実に情意面でも理論面でも自分を豊かにする力となりますから、若い人には周りの人と良く話をするをぜひ進めたいと思います。

私は、運よく大学に就職ができ、幸いにして現在にいたるまで身近な同僚にも父母や家族の協力にも恵まれてきました。忘れっぽい性格のため、困難な時の記憶はあまりないのですが、それでもどの年代のときも共通して常にあくせくとして時間に追われていたように思います。どこの手を抜くかということを見つめて行っていたわけではないのですが、当然いずれの場面においてもごく自然に手が抜けていたのだと思います。それらを寛容にも見過ごしてくれていただろう周囲の方々に感謝し、これからは周囲のあらゆる方へのご恩返し時代と考えています。研究者だけの問題ではないのですが、フルタイムで働くためには私的生活の環境整備は必須です。当事者としては生活にまつわる物事をあきらめずに合理的かつ効率的に考え、より良く対処するしかないのですが、社会的には働く女性の生活アシスタントのような職種が組織的に整備されてほしいと常々考えています。

陸水学は物理化学生物地学的な境界を越え、水の世界に関する総合的理解を共有しあえる分野と考えます。東海支部会では発足当初から幅広く水にかかわる多様なテーマについて、研究発表会などを通じて相互に学び合う機会を重視してきました。これは身近な東海地方のフィールドをいろいろな視点を持って見る機会を与えてくれました。今後とも支部会の活動を支えるために、特に大学生やより若い世代を対象とするサマースクールや見学会の意義は大きいと感じています。私自身に画期的な提案があるわけではないのですが、大学の先生方に学生とともに参加してもらうことを促すこと、初等・中等教育の現場に様々な手を使って働きかけ続けることが大切だと思います。そのための具体的に魅力的な戦略が幹事会を中心として検討されることを願っています。そしてできる場面があればお手伝いしたいと考えています。これからも東海支部会が緩やかな交流の場、だれもが研究成果を心安く発表できる受け皿、学び合う機会として継続されることを願っています。